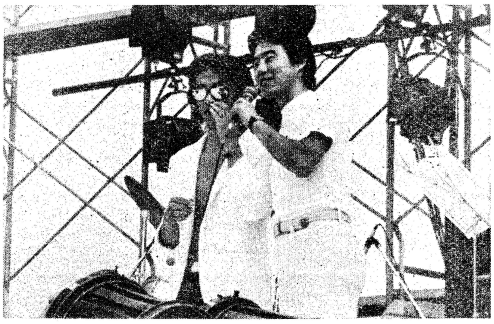
昭和53年10月15日発行　第851号　とかち新聞　（第三種郵便物認可）

ラジオ三本に全国ツアー



「千春イン足寄」に登場した市川デイレクター

これまで千春は、月曜日深夜の一時から二時間のオールナイト・ニッポンに、水曜日深夜〇時から五十分間のアタック・ヤングの二本のディスク・ジョッキーに出演していましたが、十月からは土曜日午後四時から一時間のFM東京「ひとつぶの青春」がふえて、毎週三本のレギュラー番組をもたされて、まるで千歳と羽田を往復しているようなところへもつてきて、全国各地からコンサートの希望が多くて

◎十月

20日　愛知県勤労会館
28日　ヤング・ヒットテンター STVホール

◎十一月

1日　仙台電力ホール
12日　山梨県民会館
14日　フオークコンテスト
16日　旭川市民文化会館
17日　北見市民会館
24日　小樽市民会館
26日　千歳市スポーツセンター

◎十二月

5日　松山市民会館
6日　高知県民文化センター
8日　下関市民会館
9日　倉敷市民会館
13日　大阪サンケイホール
16日　釧路厚生年金体育館
17日　帯広市民会館
20日　函館市民会館

といった状態で全国を飛びまわつておりますので、このごろはふるさとの足寄でのんびりすごす日はすくなくなりました。

ベストテン入りに

足寄のスーパースターといわれながら一年あまりでラジオやコンサート活動で徐々に全国的な規模で知られるシンガー・ソング・ライターになりつつありますが、これまでコンフィデンス調査のヒット曲ベスト五十では二十位台を前後していたものの、十月九日付で「季節の中で」が八位となつて、はじめてベストテン入りをしたことです。

千春本人にすれば、こうすればヒットするだろうという商業的打算によつて詩や曲をつくつているのではなく、二十二才の心情からほとばしるままに歌つているのがつぎつぎとレコード化されているためです。

あなたが決める78年スターベスト10としてプチセブンでは毎号読者による投票をつづけていましたが、十月二十日号でその決定版として

1位　世良公則とツイスト
2位　郷ひろみ
3位　レイジー
4位　原田真二
5位　松山千春
6位　西条秀樹
7位　野口五郎
8位　アリス
9位　国広富之
10位　清水健太郎

という結果を発表していましたが、雑誌社の方へは中間発表の段階で千春を流行歌手やアイドル歌手扱いをしないでほしいと申し入れたところ、これほどになるとは思わなかつたが読者の投票なので正確に発表したとのことでした。

こうした千春の在り方に投影されている。歌心も、素朴から複雑なコミュニケーションまでかぎ分ける感覚が鋭敏になつて来た。叙情派のシンガーソングライターとして貴重な場所を占めるアルバム。アコースティックなサウンドの中で「松山千春（キヤニオン）自然とのかかわりが歌の骨格なしていることを鮮明にした千春の歌づくり。都会へ出て見つめる北国のふるさとは、人にも、物にも、季節に対しても、すべての目と心に

「歩き続ける時」

サードアルバム

『松山千春「歩き続ける時」のフレーズ区切つて歌う胸につきさる感じ。「寒い夜」の広がりがわいてくる、千春の世界は聞きごたえがある。』

これは「北海道新聞」の今月のレコード欄での飯田廉博氏の一文です。

ついていろいろな意見が寄せられています。

★　★

十和田市のY・Kさんから『私はこのごろ千春さんのファンの間で千春さんは「アイドル」になつてきたと思うのです、千春さんはすればこうしてきましたフォーク歌手そのフォーク界にはアイドルなど全くの無必要なのではないでしょうか、千春がだんだん有名になつたためにに全国にファンがふえてきたのは喜ぶべきことだと思うのです、ですが私は有名になつてほしくなかつた、岡林信康さんや三上寛さんのように地道に活動していてほしかつたのです、私はまだ千春さんのコンサートは見たことはありません、聞いたところによると西城秀樹や郷ひろみのそれと変りないというではありませんか、アイドル歌手であれば騒がれるのは人気のバロメータです、しかし彼らは人の作つた歌を歌う、いわば人形です、それに比べて千春さんのようにシンガーソングライターは自分の作つた歌を何かの目的のため人に聞かせたくて歌っているんです、歌が命を持つているんです、その命を持つた歌を心をこめて歌っている時は静かに聞くべきだと思うのです、今のファンは千春のようなことをわかつていないと思うのです、ただ歌も聞かずに騒いでいれば歌手が喜んでくれると思うのです、そんなのファンじゃありません、千春さんのファンにはそんな人いてほしくないんです、今のままだと千春さんがアイドル歌手になつてしまいそうでこわいんです（何を言いたいのかわからなくなつてきました、かなり自分勝手な事を書き続けたみたいでおこりにならないで下さい）」

★　★

福岡県のM・Nさんから『千春にテレビに出演してノ」ということですが僕は絶対に反対です、月に一度ローカル番組にということですが一回出ればすぐ後の番組が殺到するしテレビというものは実に恐ろしいものです、おかしくないところでも笑わなくてはならない時があつたりするだろうし千春の態度がでかくなつてしまうと思います、千春は僕たちに「てめえら」「おまえら」とか言つて僕たちにしては身近に感じるのですがテレビでもこんなふうにしやべつたら千春に歌を わかつてくれない人達が色々投書したりすると思うのです、足寄町に千春がいるからこそイイ歌を歌えてほめ人に聞かせたくて歌っているんです、歌が命を持つているんです、その命を持つた歌が好きな人はコンサートへ行つて同じ気持の人たちと一緒に盛りあがるということはとつてもいいことです、テレビ出演は大反対です。』

お答え

NHKをはじめ各民放局からテレビ出演のご依頼は常にありますが、単なる歌番組はすべてお断りしています。ただし千春ほしくないんです。アコースティックなサウンドの中で「歩き続ける時」のフレーズ区切つて歌う胸につきさる感じ。「寒い夜」の広がりが わいてくる、千春の世界は聞きごたえがある。』

これは「北海道新聞」の今月のレコード欄での飯田廉博氏の一文です。

★　★

名寄市のT・Hさんから『名寄でのコンサート見ました、そして千春といつしように歌いました、実は今夜、風の音、馬の泣き声、まだまだ感動がぬけないのです、オープニングの「かざぐるま」から「青春2」まで千春を見つめすぎて目が痛くなつたくらいです、千春つて本当に一定の規模をこえたスターですね、他の誰とも違う自分だけの道があるつていう？もしもあるとすれば、ただこれからもずつと今のままのコンサート本当に最後まで転んでしまつたつていう話足寄と名寄の比較、男と女の生き方について、足寄の夜、風の音、馬の泣き声、それから名寄を好きだつて言つてくれたこと、又いつか来てくれるつて言つたこと、苦しいことがあつても心の中で泣いて陽気にふるまう人が好きだつていつた一生忘れません、これ以上の何があるつていう？もしもあるとすれば、ただこれからもずつと今のままでいてずつと歌い続けてくれれば、D・Jもずつと続けてくれれば私達は満足なんです、週二回の上京が苦しければ北海道からで、北海道での千春の方がずつと心にしみて来るのは当然だけどそれが本当の千春なんだから、とにかく無理をせずに頑張つて下さい、苦しい時には私達ファンのことを思い出して、乗り越えて下さいたとえ千春に一定の女性が出来ても私達は私達です、以前と変らぬ愛を千春にあずけていきます、心の中が カラッポになつたようだつた、さびしいというよりむしろに寒かつた、つめたい風が、毎日おれのからだを吹きぬけていくのだつた。

これですべて終りだと、なかばあきらめかけたころもういちど、彼女に会うチャンスにめぐりあえた。

落ちこみながらも、合唱団でがんばつていたことが実つたのだ。

そのころ、北海道合唱コンクールというのがあつた足寄西小学校合唱団の一員として、おれはさつそくと帯広の市民会館のステージにあがつた。

会場は広かつた、その広い会場に見おぼえのある顔が…あつた、見えた。

おれの心を痛めたまま、なにもいわずに転校していつたあの子だつた。

これが、おれの初恋のすべてだつた、たつたひとつのことはすらかわすことなく終わつた。

（久しぶりで自宅へ帰つてもすぐ出かける千春とオイの光里）

千春の初恋談義　セブンティンから

「愛を歌つて二十二年」とさそいがあつた。

おれは〝しめた〟と思つた、合唱団に入れば、いつも彼女を見ていられる、もしかして、彼女と仲よくなれるかもしれないとも考えた。

おれと同じ思いの男が何人かいた、とにかく、その子はもてたのだ。

しかし、おれはやつらには勝てる、おれの敵ではない、と思つていた。

が、それは甘かつた、いつのまにか、彼女をとりまくひとつのグループができていた、いわゆる、いいとこのお坊ちやんの集団だつた。

おれとは、まるで気のあわない連中だつた、品がよくやけにかしこそうな顔をした連中だつた、貧乏生活にならされてきおれとはまるで肌のあわない連中だつた。

合唱の練習のときも、みんなにかこまれて笑つている彼女を遠くで見ていた。

彼女をとりまくグループの中に入れないおれだ、そうでもする以外、どうしようもなかつたのだ。

さびしかつたが、彼女がおれの目のとどくところにいるかぎり、おれは幸せだつた。

だが、その幸せもまもなく消えた、五年のころだつたか、その子は転校していつた。

あつけなかつた、じつになあつけなかつた、彼女がいなくなつた日から、おれは落ちこんだ、立ちなおるのに、長い時間がかかつた。

心の中がカラッポになつたようだつた、さびしいというよりむしろに寒かつた、つめたい風が、毎日おれのからだを吹きぬけていくのだつた。

これですべて終りだと、なかばあきらめかけたころもういちど、彼女に会うチャンスにめぐりあえた。

落ちこみながらも、合唱団でがんばつていたことが実つたのだ。

そのころ、北海道合唱コンクールというのがあつた足寄西小学校合唱団の一員として、おれはさつそくと帯広の市民会館のステージにあがつた。

会場は広かつた、その広い会場に見おぼえのある顔が…あつた、見えた。

おれの心を痛めたまま、なにもいわずに転校していつたあの子だつた。

これが、おれの初恋のすべてだつた、たつたひとつのことはすらかわすことなく終わつた。

お知らせ

この「千春特集号」を新規に購読ご希望の方は、一カ年送料とも二千円お送り下さい。

作年から購読の方で前金切れの方はご送金下さい。

「千春イン足寄」の記念写真、本紙掲載の大きさで十枚一組五百円、これとは内容が違つて二倍の大きさのカラー十枚一組二千円でおわけしています。

千春のサインご希望の方は色紙なりハンカチなりをお送り下さい、そのさい返信用封筒に切手をはり住所氏名を書いて下さい。